

他力

―位職便り―



第十七号（令和元年五月）

専徳寺住職 弘中満雄

【観梅】

今月から始まる新年号「令和」の典拠は、『万葉集』巻五、「梅花」の歌三十二首の「序文」と発表されました。

時に初春の今月にして、気淑く風和き…

空気はよく風爽やかな正月、主人大伴旅人による観梅の宴が催されました。

当時、外来から持ちこまれた貴重な「梅の木」を愛でつつ、お酒を酌み交わし、そこで歌会が始まりました。その中に、

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の
流れ来るかも
（巻五・822）

（私の園に梅の花が散る。はるか遠い天から雪が流れてくるのだろうか）

旅人による「梅花」を代表する歌です。優雅な会の雰囲気を表しています。

新しい時代の幕開けです。

好ましき良き時代を念じます。

【貧窮】

ところで『万葉集』巻五に



は、もう一つ大変有名な歌があります。良かったら声に出してみてください。

天地は 広しといへど
吾が為は 狭くやなりぬる
日月は 明しといへど
吾が為は 照りや給はぬ
人皆か 吾のみや然る

わくらばに 人とはあるを

人並に 吾も作れるを（巻五・892）

（天地は広いというけれど、私にとつては狭くなるようだ。日月は明るいというけれど、私には照ってはくれないようだ。人はみんなこんなもののだろうか。そ

れとも私だけがこうなのだろうか。たま

たま人間として生きているのに。人並み

に私も働いているのに…）

山上憶良による「貧窮問答歌」の一部

です。生活が貧しく、寒い夜を震えながらすごしている、二人の男の告白の歌です。

貧しさの直接の原因は税金です。しかし歌全体をみると、物理的・生理的な飢寒だけでなく、人間のもつ精神的な貧しさ、満たされない心の窮状までうかがえます。

わくらばに 人とはあるを…

たまたま人に生まれ、普通に生きてきたつもりなのに、なぜこんな目に遭わなければならぬのか。老いの悩み、病の苦しみ。惜別、孤独、人間関係の苦しき…。

物が豊かな現代。しかし今でも多くの人がこの歌に共感せずにはいられません。

【大施主】

わが口に念仏こぼれひさかたの因（浄土）
より慈悲の流れ来るかな

（私の口から念仏がこぼれる。お浄土より仏のお慈悲が私に流れこむことだなあ）
満たされない心、貧しい窮状の私…と知り抜いた仏さまは、立ちあがらずにはおられませんでした。本願を建て、その誓い通り、自らの功德をまんべんなく「南無阿弥陀仏」の名号にこめられました。

「ナモアマミダブツ」。声に出して下さい。

それは「大施主」（重誓偈）たる阿弥陀さまの「かならず救う」という功德全体が、あなたにふり向け与えられた答えです。

令和の新時代。あらためてお念仏の勿体なさをかみしめる事です。（おわり）